2019年10月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第513号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体139円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター
編集　アクセス編集委員会
〒162-0836　東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

発生機としての本屋

本のあるところ ajiroの一年

出版社の書肆侃侃房が運営する書店＆カフェ、選書は海外文学と詩歌と人文書に特化

☆★☆

文／書肆侃侃房・藤枝大

「本のあるところ ajiro」外観

「本のあるところ ajiro」店内

2018年10月、福岡の天神に「本のあるところ ajiro」をつくった。9月末にはプレオープンしていたので、開店からちょうど一年になる。ペンキを塗り、什器を搬入し、書籍が棚に並びだしたのが昨年のいまごろだった。出版社の書肆侃侃房が運営する書店＆カフェで、選書は海外文学と詩歌と人文書に特化。全国的にみても、なかなか珍しい形態だと思う。

店ができる前には、前史があった。東京の出版社に勤めていたころ、海外文学の読書会「ガイブンキョウク」を立ち上げた。2015年5月から毎月1冊、東京都文京区で外国文学を読んでいく（名前の由来はここにある）。ナーダシュ・ペーテル（ハンガリー文学）、キルメン・ウリベ（バスク文学）、ミロラド・パヴィチ（セルビア文学）、ムルド・フェラウン（アルジェリア文学）など、普段なかなか目にすることのない世界各地の文学からも課題本を設定し、毎回ちがう参加者と読破していったのだ。熱中して語り合い、終われば飲み会もなく自分の生活に帰っていく。さながら地下活動のようで気持ちがよかった。2年前に福岡の版元に転じたあとも、読書会は天神で続けていた。

いまの勤め先・書肆侃侃房では、歌集を刊行している。これまでに約90点ほど。日々実感するが、短歌を読む若い読者が増えている。歌をいくつかひいてみたい。

イルカがとぶイルカがおちる何も言ってないのにきみが「ん？」と振り向く／初谷むい『花は泡、そこにいたって会いたいよ』

算数のノートの隅で育ててた棒人間よ　まだ走れるか／寺井奈緒美『アーのようなカー』

身ひとつでできることなど少なくて全速力で逃げた犬追う／戸田響子『煮汁』

平成はＴＳＵＴＡＹＡの返却ボックスを中までくまなく照らした夕日／岡野大嗣『たやすみなさい』

文学フリマに出版社のブースを出せば、一日で驚くほどの冊数が売れていく。短歌においては版元が刊行する歌集ももちろん重要だが、大学短歌会の機関誌に大きな盛り上がりが見られる。これからの才能が集い、切磋琢磨している。こういった草の根の活動には、一般の書店ではなかなか触れることができない。同人誌にはISBNコードが付いておらず、流通経路が限られるためだ。

いつしか場所が必要だと思うようになった。英語以外からの翻訳文芸書も重点的にならび、短歌や詩や俳句の読者がかかわりをもてる拠点。会社で提案してみたところ社長の「やってみよう」との後押しがあり、繁華街「親不孝通り」のそばに空きスペースが偶然

発生機としての本屋
本のあるところ ajiro の一年

上妻世海さんのイベントの様子

見つかって、あっという間に開店日がやってきた。道路に面したビルの一階にあり、店内の左の壁際には本棚、右の壁際に平台がある。対面で座れるテーブル席が３つ、カウンター席も設けてある。カフェサービスのために珈琲の淹れ方を専門家に教えてもらった。お客さんはゆっくりくつろぎながら独りで読書をすることもできるし、店のスタッフと歓談もできる。

いざ店が始まってみると、若いお客さんが多かった。ほかの書店では購入できない本があると全国から足を運んでくださる方がいた。選書に気を配ったが、イベントにも力を入れた。青柳悦子さん（マグレブ文学）や阿部賢一さん（チェコ文学）などの翻訳者・外国文学研究者をゲストに迎えて読書会を開催した。チベットの作家ラシャムジャさんや韓国の作家チョン・ユジョンさんが訪れてくれた。短歌では東直子さんや黒瀬珂瀾さん、大森静佳さんなどの歌人がお話をしてくださった。毎月一度「ajiro 歌会」も開催している。地元の歌人が司会をしてくれて、店内の歌集の歌を語り合う。自分で作るわけではないから、誰でも参加できる。この歌会をきっかけに、自分でも短歌を作るようになった人がいるのがうれしい。九大短歌会の歌会の場所としても使っていただいている。年に３回、地元の書店員さんと読者の交流の場を作っている。自店のことだけ考えていても仕方がない。この地域全体が盛り上がったほうがいい。

出版社が書店をやるとは、どういうことだろうか。かつて月曜社の小林浩さんは「自前で出版にチャレンジしようという本屋さんが出てきている中で、小出版社もリアルな出会いの場を持とうと挑戦する気持ちは必要」だとツイッターに書かれていた（2019年４月11日、https://twitter.com/uragetsu/status/1116247645859667973）。このツイートの前には「やはり、書店さんや司書さんや読者の方に、自社が発行している書籍を品切本も含めて全点の現物を見ていただけるようなショールーム、店売、イベントスペースを兼ねた物理的店舗がどうしても必要な気がする」「来て下さった方にはお茶やお酒の一杯でも出して、ひとしきりお話ししたい。（……）本を作ってる自分自身が来客に対応し、直接触れ合うべき」「他社とコラボするなど色々と手はあると思うものの、自前＆地元を重点にしたい気持ち」「他社さんにも開かれた場所にする方が自分にとっては自然な気がする」との投稿もある。

短歌や俳句の機関誌・結社誌などが並ぶ棚

海外文学の本棚。店として推したい作家のプレートが並ぶ。

書肆侃侃房という出版社の書籍を実際に手にとって見ていただき、著者のイベントを行いながら（リアルな出会いの場）、海外文学や詩歌といった分野を少しでも身近なものに感じてもらうための場所。ajiro は店としては大きくはない。だが、店内に海外文学や詩歌が目一杯並んでいると、そこでしか感じられない独特の空間が立ち上がる。思いを込めてつくった場所だが、押し付けがましさがあってはならない。あくまで「本のあるところ」。書籍は物として、まず独立して存在している。このことの重要さ。だからこそ、そこに人は集える。本が「あり」、人が「いる」ことから、すべてを始められる。一つずつ試してみる。それをオープンなかたちで開示し続ける。これから先、どんなことをやっていけるだろうか。

最後に宮野さんのことを書いておきたい。哲学者の宮野真生子さんには、今年４月に人類学者の磯野真穂さんとイベントをしていただいた。それからほどなくして、７月22日にがんで亡くなられた。42歳だった。打ち合わせのために初めてお会いした２月、天神の喫茶店「風街」で宮野さんが語られた学問への思い、地元福岡でやってみたいこと、その熱い語りが忘れられない。宮野さんと磯野さんの対談は ajiro にとっては初の人文系のイベントだったが、30名ちかいお客さんが参加された。このイベントがきっかけとなり、平井靖史さんや藤田尚志さん

など福岡の研究者のみなさんとの交流が生まれることになる。

宮野さんと磯野さんはこのajiroでのイベントで意気投合され、往復書簡を交わされた。宮野さんの最期の日々が刻まれたこのやり取りは、今月末に『急に具合が悪くなる』（晶文社）という書籍になる。絶筆ともいえる手紙の最後に宮野さんはこう書いている。「偶然に出会い、タイミングだと感じ、お互いがそれをつかみ取ったとき、ありえないことが次々と反転して生じ始めた。やっぱりこれは起こらないことも可能だった、偶然事だけど、それは自然に生まれたわけではないのです。私たちが、そこにある偶然のタイミングを見極め、そこに乗り、時間の発生をつかみ取ったからこそ、生まれたことなのです」。さらにこう続ける。「この時間の発生機をつかみ取ること、そこにたどり着き、引きだしてくることこそ、薄っぺらい流れてゆく時間の手前にある、時間の厚みの正体だと私は考えます」。

日を重ねるごとに、たくさんの人の思いがajiroに加わる。その一つひとつを大事にしながら、この空間にしかできないことを模索していきたい。宮野さんの言葉を借りるなら、ajiroを発生機として育ててみたい。

＊

（ふじえ　だい／書肆侃侃房「本のあるところ ajiro」担当）

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

『私説・古代出雲　「カミの支配」から「人の支配」へ』●原　一征著

日本列島で国家が発生した時期について、7世紀とする古代史の定説や、倭の五王以降5世紀後葉から6世紀にかけてとする説、卑弥呼が没する3世紀中頃とする説等があるが、著者はこれらの各学説が「人（王）の支配」を前提としていると指摘する。島根県の荒神谷遺跡から出土した青銅器等を分析すると古代出雲では弥生時代から「宗教（カミ）の支配」が行われていたとみられるが、ではカミが支配する部族連合体は国家と言えるのか。著者は国家の三要素である領土、領民、主権（統治権）を古代出雲に当てはめて検討し、そこでは宗教による神権政治が行われており、古代出雲神政国家が存在していたとするのである。だとすると、古代出雲神政国家はいつどのようして終焉し、人が支配する「王国」へと転換することになったのか。本書は、荒神谷遺跡や志谷奥遺跡、田和山遺跡、友田遺跡等古代出雲の遺跡群を宗教学的な、あるいは人類学的な想像力をもって考察し、その変遷の様を解明していく。

◆1800円・A5判・210頁・**山陰中央新報社**・島根・201907刊・ISBN9784879032300

『ヤナギ通りのおばけやしき』●ルイス・スロボドキン作 / 小宮由訳

「一年のうち、ある一晩だけヤナギ通りに住んでいる子どもたちが、おとなたちにゆるされていることがあります。それはへんなふくをきたり、こわいおめんをかぶったり、顔に色をぬったりして、人を驚かせることです…」。そんなハロウィンの夜のこと。普段は誰も住んでいない、垣根が茫々で暗くて古い家、「ヤナギ通りのおばけやしき」の窓に明かりが灯っていることに二人の子どもたちが気づきました。「見て、明かりよ！」と子どものうちの一人、リリーが思わず叫びました。「ここにいってみようよ」とビリーが答えます。「ママは、ヤナギ通りの家ならどこだっていいって、いってたよ」。そう言って真っすぐ玄関まで歩いていくと止める間もなくチャイムを鳴らしてしまいました…。まるでこわい映画の始まりのような冒頭場面ですが、いえいえ、ほんもののおばけが出てきたり、こどもたちが怪物にたべられてしまうわけではありません。玄関のドアが開いて、「ヤナギ通りのおばけやしき」から出てきたのは??

◆1500円・A5判・55頁・**瑞雲舎**・東京・201909刊・ISBN9784907613273

『書評稼業四十年』●北上次郎著

本に関する情報が満載の月刊誌「本の雑誌」。1976年に目黒考二、椎名誠らにより創刊されたが、著者の「北上次郎」は目黒考二が書評を書く際のペンネーム。「本の雑誌」創刊号にも、この名でミステリー時評を掲載している。本書は書評家として四十年以上を過ごしてきた著者が書評稼業に的を絞った回想録。中学を卒業する春休みに少年野球のチームメイトの影響で初めて読んだ本が松本清張の『点と線』。以後、大衆小説に親しみ、五木寛之や野坂昭如の登場で中間小説誌の愛読者にもなる。1960年代後半は「小説現代」「オール讀物」「小説新潮」といった中間小説誌が最も売れた黄金時代であり、その考察も興味深い。書評仲間及び編集者や作家のエピソード、書評家の副業で圧倒的に多いのは新人賞の下読みといったこぼれ話も楽しめる。とあるファンが送ってくれた著者の「解説文庫リスト」がきっかけで作り始めたリストと著作一覧も収録。四十年の絶妙な歩みが窺える。いろいろな裏話もあって面白かったです。

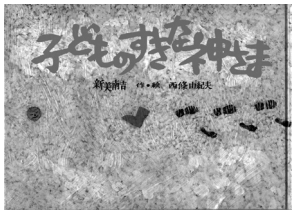
◆1700円・四六判・269頁・**本の雑誌社**・東京・201907刊・ISBN9784860114329

『土と生きる －川辺川ダム水没予定地に暮らし続けた夫婦』●小林正明著

人の個性は年を取ることで変わるものではない。亡くなることで個性は消える。そして新たに生まれた人の個性が育ち、入れ替わることで時代は動いていくものなのだろう。この本では、川辺川ダム建設のために高台へ移転した熊本県五木村の役場所在地 頭地の旧集落に最後まで残り住まれた老夫婦の暮らしに焦点を当てている。76枚のモノクロ写真とそのキャプション、8ページの本文というシンプルな構成は、人が持つ本質を引き出している。昭和一桁生まれの老夫婦は、10年間1戸だけの旧集落で過ごされ、晩年の2年間はご主人だけが残られた。ご主人の古里への想い、畑の土への想いは、紙上に残すことはできてもそのまま伝えることはできない。ご主人は、令和の世を迎える直前に亡くなられた。馬小屋を併設した老夫婦の家も、消えていくことだろう。「1戸残った」というダム建設地の環境が、誰もがたどる老いへの道のりを特別なものとしている感がある。

◆4400円・237mm×255mm判・95頁・**花乱社**・福岡・201908刊・ISBN9784910038025

『子どものすきな神さま』●新美南吉・作 / 西條由紀夫・絵



絵積もった雪に顔を押し当てて遊ぶ子どもたち。13人なのに顔形が一つ多い。神さまが来ているに違いない。つかまえよう。慌てた神さまはのっぽの子どもの股をくぐり、小さな赤い靴を落として森に逃げ帰る。子どもたちは神さまはこんな靴をはいていたんだと笑いこける。明るくいたずら好きな子どもたちと、子どもが大好きなのにちょっと気弱な神さまのユーモラスな物語。教訓や、取り立てて感動のドラマがあるわけでもないのに心が躍る。西條由紀夫の絵は、無邪気で、好奇心に目を輝かせる子どもたちの豊な表情を生き生きととらえ、雪に顔を押し当て、子どもの股をくぐり、森の木の枝影から遊ぼうと呼びかける姿の見えない神さまの想像かきたててくれる。雪の上の小さな靴の赤と、それを面白そうに見つめているであろう子どもたちの長靴の黒のコントラストが印象的だ。新美南吉生誕105年記念事業・第2回安城市新美南吉絵本大賞（おとなの部）最優秀賞受賞作品。

◆1300円・182mm×257mm判・24頁・**サンライズ出版**・滋賀・201907刊・ISBN9784883256624

『ゲンパッチー －原発のおはなし　子どもたちへのメッセージ』●ちづよ著

ある夜、子どもたちのもとへ折り鶴たちが、「イキルスベ」を教えてくれると言って訪ねてきました。折り鶴たちに誘われて子どもたちは電気がどこから来るのかを見に行くのですが、そこで原発の抱える問題点について知ることになります。原発は事故があると危険なだけでなく、日常的に被曝労働が必要になること、使用済核燃料が次々と生まれることなどもわかりやすく解説されています。そして国はなぜ核燃料サイクル計画に固執するのか。核燃料サイクルを止めると外国には核兵器開発を疑われ、一時的に貯蔵している自治体からは運び出しを求められてしまうからです。しかし核燃料サイクルは完全に破綻。この状況での原発再稼動など正気の沙汰とは思えません。原発は後世まで長くツケを残してしまいます。

そしてひたすらに経済性を追求するだけでよいのだろうかとも問いかけます。広く若い世代に読んでもらい、自らの「イキルスベ」を選ぶ一助になればと思います。

◆1500円・A5判・304頁・**石風社**・福岡・201908刊・ISBN9784883442867

この「新刊ダイジェスト」のバックナンバーを弊社Ｗｅｂサイトにたくさん掲載してます。機会がございましたらぜひご覧ください。アドレスは以下の通りです。右のＱＲコードもご利用ください。　http://neil.chips.jp/chihosho/digest/index.html

地方小出版 流通センター
ジャンル別 新刊案内
2019年8月1日～31日
流通センター着
※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。
表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

【雑誌】

◆**あおもり草子**　Ｎｏ．２６０　企画集団ぷりずむ編　Ａ４　48頁　５５６円　企画集団ぷりずむ　［青森］　978-4-503-21829-2　19/08

◆**Ｓ－ｓｔｙｌｅ**　９　ｖｏｌ．６５７　プレスアート編　298mm×232mm　159頁

売行良好書

期間：2019年8月15日～9月14日
※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

［出荷センター扱い］

(1)『お砂糖とスパイスと爆発的な何か』1500円・書肆侃侃房　(2)『たぷの里』1200円・ナナロク社　(3)『産業遺産巡礼　日本編』2200円・弦書房　(4)『よみきかせのきほん』750円・東京子ども図書館　(5)『赤ずきんとオオカミのトラウマ・ケア』1800円・アスク・ヒューマン・ケア　(6)『小鳥たち』2200円・ステュディオ・パラボリカ　(7)『明智光秀と近江・丹波』1500円・サンライズ出版　(8)『東京の森のカフェ』1300円・書肆侃侃房　(9)『いごってなあに？』1400円・ぶんしん出版　(10)『５２と呼ばれたクジラ』1500円・リーブル出版　(11)『働くわたし』1500円・本の雑誌社　(12)『日本統治下の朝鮮シネマ群像』2200円・弦書房　(13)『移民と日本人』1800円・無明舎出版

［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］

(1)『お砂糖とスパイスと爆発的な何か』1500円・書肆侃侃房　(2)『東京かわら版　９月号』556円・東京かわら版　(3)『本の雑誌　４３６号』667円・本の雑誌社　(4)『パズル通信ニコリ　Ｖｏｌ．１６８』900円・ニコリ　(5)『続・ニホンという滅び行く国に生まれた若い君たちへ』1500円・白馬社　(6)『第１５回 京都検定問題と解説』1400円・京都新聞企画事業　(7)『小鳥たち』2200円・ステュディオ・パラボリカ　(8)『大統領の密使／大統領の晩餐』1800円・フリースタイル　(9)『たぷの里』1200円・ナナロク社　(10)『終らない物語』2200円・フリースタイル

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

(1)『一九三〇年代モダニズム詩集』2700円・みずのわ出版　(2)『ＪＲ芸備線　輸送密度13』1800円・菁文社　(3)『ナガサキの郵便配達』809円・スーパーエディション　(4)『地名は語る』900円・埼玉新聞社　(5)『天空の聖域ラルンガル』2200円・中国書店（集広舎）　(6)『2019世代いわて高校野球ファイル』1300円・岩手日報社　(7)『出雲王国とヤマト政権』2250円・大元出版　(8)『新装版 奥武蔵登山詳細図 全130コース』900円・吉備人出版　(9)『教科書と一緒に読む津軽の歴史』1700円・弘前大学出版会　(10)『心ふるえる土佐の味』1500円・高知新聞社　(11)『封印された頼朝の軌跡』1800円・冬花社　(12)『大相撲　朝之山英樹　大器花咲く』1389円・北日本新聞社

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼先月号より本誌の「新刊ダイジェスト」「ジャンル別新刊案内」「売行良好書」での**価格表記が、本体価格に変更**となっております。それまでは消費税率8%税込価格表記でした。ご了承ください。

▼明治大学リバティアカデミー公開講座**【ものがたり神保町の150年】**について前号にて概要をお知らせいたしましたが、今回、各回の詳細についてお伝えいたします。

・10/5（土）【神保町はじめはじめのものがたり - 幕末から明治へ】…『江戸切絵図』などをもとに江戸から明治に到る神保町の街並みの変化をたどります。…講師・飯澤文夫（コーディネータ、明治大学大学史資料センター研究調査員）

・10/19（土）【本の街 - 誕生のものがたり】…明治10年の有斐閣を嚆矢に、神保町が本の街として誕生するものがたりをひも解きます。…講師・鹿島茂（明治大学国際日本学部教授）

・11/02（土）【グラフ誌『風俗画報』を散策する - 江戸から明治へ収束する神保町 -】…上野・忍ヶ岡から湯島台に、そして駿河台を経て「知」が収束する神保町へ、時空を超える散歩をしてみたいと思います。…講師・吉田悦志（明治大学名誉教授・明治大学史資料セ ンター研究調査員）

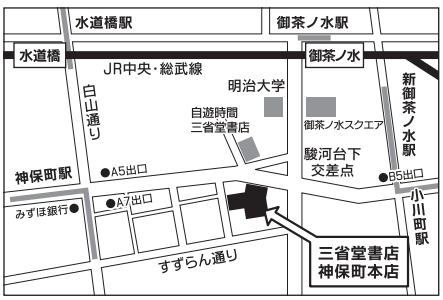
・11/16（土）【神保町 - 文豪たちのものがたり】…鴎外、一葉、漱石など若き日に行き来した作家たちの在りし日の姿を浮き上らせ、作品を味わいます。…講師・野上 暁（日本ペンクラブ常務理事・評論家・東京純心大学こども学科客員教授）

・11/30（土）【古書店 - 昔語りの神保町】…一誠堂書店酒井健彦氏、悠久堂書店諏訪雅夫氏、誠心堂書店橋口侯之介氏に、古書の街を作りげてきたものがたりを熱く語ってもらいます。…講師・八木壯一（本の街・神保町を元気にする会 事務局長）

（明治大学リバティアカデミーサイトより）

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

BOOKS SANSEIDO
三省堂書店
営業のごあんない

神保町本店 ４階
地方出版・小出版物フロア
営業時間　10：00 AM ～ 8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp

本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。